



つよし学園 特集

管理者あいさつ

つよし学園 施設長 谷口正純



つよし学園は昭和40年10月1日に児童入所施設としてスタートしました。児童で入所された方々も年数が経ち次の行き先を探さなくてはなりません。そのような流れから、昭和50年代に入ると成人入所施設の建設が全国で始まります。同時に、「町の中で暮らす」という流れもでき、グループホームや通所の作業所も作られてきたのもこの時期頃からと記憶しています。

つよし会も昭和54年に成人入所施設つよし寮を開所、昭和60年に通所事業所つよし共働センターを開所し、地域へ移行が難しい方々への受け皿つくりと地域移行を進めてきました。

つよし学園も平成7年に児童入所児の減少と地域移行が難しい重度の方々の行き場所確保のため、成人部を併設開所し、同じ建物に児童の子供たちと成人の方が一緒に暮らすという現実が生まれ、現在に至っておりまます。

児童、成人者にかかわらず、入所施設の役割を考えるとき、安全・安心をしっかりと守り、共に生活をして共に成長をしていく。そして、利用されている方々の発達を全職員で保障していくこと、と捉えています。

糸賀一雄先生は、改めて言うまでもなく近江学園を作られた中心的な方であります。その糸賀先生が発達の保障について著書の中でこのように言われています。

「・・・この子らはどんなに重い障がい持っていても、かけがえのない命をもっていて、かけがえのない個性的な自己実現をしているのです。人間として生れて人間となっていくのです。その自己実現こそが創造であり、生産なのです。私たちのねがいは、重症な障がいを持った子たちも立派な生産者であるという事を認め合える社会をつくろうという事です。『この子らに世の光を』あててやろうという憐れみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよ磨きをかけて輝かそうというのです。『この子らを世の光に』です。

この子らが生まれながらにして持っている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬという事なのです・・・」（「この子らを世の光に」から引用）

この文章の一節を、事あるごとに川越喜美子初代園長から聞いて居りました。

糸賀先生がこのことを言われてからすでに50年以上の月日がたっております。

つよし会は？社会は？糸賀先生の言われた社会(法人)になっているのでしょうか？！

現在のつよし学園の日中活動を見てみると、決して多いとは言えない職員数ではありますが、運玉制作(窯業)、農耕(菜園程度)、リハビリ的活動、個別ワーク等に取り組んでおります。

その中で今年度、粘土を素材に自由で制約のない遊び活動の時間を作っています。

ほぼ一年間の取り組み中で、「この利用者が、こんな表現が出来るんだ！」とか、「ほんとは手先が器用だったんだ！」と新たな発見をさせてもらいました。

一塊の粘土を手に取り、丸め、伸ばし、くっつけ・・・という単純な中にも繊細な動きを織り交ぜながら作られていく作品を見せてもらい、身震いするような感動を感じました。

若い担当の職員も同じ気持であったようで、「見てください！」と、その作品群を写真に撮り、自費で作ったミニ写真集を見せてくれました。この時の感動を忘れずにいて欲しい！他の職員に伝えていくて欲しい！と心から強く思いました。

まだまだ、取り組み始めたばかりで大きなことは言えませんが、小さいながらも、粘土制作以外にも目を向け、一人一人の個性に向き合い、どうしたら伸ばすことが出来るのか？何を使ったら表現しやすいのかなど試行錯誤し、他の職員と話しあい、そして取り組んでいます。

この繰り返しをこれからも止めることなく続け、周りの方々に発信し続けていくことが、利用者一人一人の個性を伸ばし発達を保障とするという事である、という事を常に強く思い進んでまいります。

今後ともご理解とご協力を賜りますよう宜しくお願ひいたします。



福祉型障害児入所施設 つよし学園児童部

施設入所支援、短期入所、日中一時支援

障害者支援施設 つよし学園成人部

施設入所支援、生活介護、短期入所、日中一時支援

今年度の目当て

利用者本位と職員のチームワークを
第一に考えて支援にあたります

お手伝いは任せつつ



全利用者の笑顔のステキな
顔写真を掲載させていただきます!!



4月から新社会人!!
頑張ります

